

3 【平成29年度親子読書研修会講演録】

「絵本作家の日常」 ～思い出の一冊～

絵本作家 高島 那生

こんにちは。絵本作家の高島那生といます。今日、大体1時間30分ぐらいです。今日は大人の方ばかりなので、裏話などしゃべっても大丈夫かなということで、いろいろお話したいと思います。よろしくお願いします。

今日は、僕の作品をどんなのか知らないよ、という方もたくさんいらっしゃると思いますので、何冊か僕がここのスクリーンに出して、読み聞かせとか、あと、ふだんの写真とか持ってきてますので、その写真を映しながらの説明とか、せっかくなので、ここにホワイトボードがありますから、ふだん僕がどうやって絵本を創っているか実践できたらなあと思います。結構込み込みで考えてきてるんですけど、もしかしたら時間余るかもしれません。ということで、とりあえず絵本から。

せっかくだるまをたくさん並べてもらったので、だるまから行きます。

『だるまだ！』。これ、中の表紙なんですけど、表紙とカバーですね。これが、この本の場合は、ちょっと違ってまして、中に、こんなだるまが描かれています。(スライドを使って『だるまだ！』の読み聞かせ)「特別大きなだるまは、こんなことにも使われるようになりました。」——これ、絵本のいいところで、表現が難しかったら、絵に任す。「こんなこと」っていうふうに言っちゃ

うんですよ。これ、便利な言葉ですよ。絵か、あれは。「だるまで家を建てた人もいます。」——いませんよね。こんな人ね。(引き続き読み聞かせ)「ほら、こんなところにも。あっ。」これが「あっ。」のところですよ。(レーザーポインタで見せながら)実はここにもだるまがいるんですよ。ああ、ここにもいる、みたいなの。凝っているんですよ。(読み聞かせ終了)というお話なんですよ。

先ほど、ここでお話(読書グループの事例発表)をされていて、すごく感動的なお話だったんですけど、これから何を学ばばいいかっていうね、結構こういうのばかりなんですけど『だるまだ！』は、何を感じ取ったらいいのかわからないっていう。好き嫌いがはっきりしていいかな、と自分では割り切って創っていますけど。

実はですね、これ、5、6年くらい前かな、もうちょい前かな、に出た本なんですけど、こ



れを創った直後から「続きはないのか。」と。(最後のページを見せながら) 招き猫ですよ。続きはないのかと言われ続けてきまして、編集者の方からも「続き、どうですかね。」とずっと言われ続けて。パート2って、大体つまらないじゃないですか。「こんなはずじゃなかった」感がとても強いので。なんですけど、今回ですね、創りました、『まねきねこだ!!』というタイトルで。びっくりマーク二つなんですけどね。『まねきねこだ!!』というタイトルで創りまして、今年7月末28日に、新刊として出る予定なんですけども、ちょうどその頃に、東京の吉祥寺美術館というところで、展示も併せてやりますので、夏休み、東京の吉祥寺に行く方がいらっしゃれば、ちょっと遠いですけどね、ここからは。でも、今日、僕、朝、飛んできましたからね。

これなんですけど、よく聞かれるんですよ。「何でだるまなんですか。」って。これ、簡単なんですよ。編集者に、「だるまで描きませんか。」って言われて、「分かりました。」って創ったんですよ。ただそれだけです。僕の場合はですね、どの作品にも言えるんですけど、描かないとじっとしてられないとか、情熱で何か時間を忘れてやり続けちゃうとか、そういうのはなくてですね、15分ごとに時計を見るとか、言ってもやらないとか、そういうような感じの性格ですので、何か、絵本のラフのストックがあって、編集者に「これどうですか。」って言われるパターンっていうのはあんまりなくて、編集者と話して、「じゃあ、お願いします。いついつまでに創る。」とか。今回のパターンみたいに、「だるまでどうですか。」というのがあるって、「じゃあ、分かりました。」というパターンが結構多いです。

このとき、本当はだるまと河童と天狗、『だるまちゃんとてんぐちゃん』の面白い絵本があるから、それ以降、それ関係で出てきてないので、このへんで創りませんか、それを僕に振ってきたかと思ったんですけど。その中で、河童、だるま、あと……天狗。この三つの中で、一番描きやすかったのはだるまなんです。この三つの中で、河童と天狗って、もう何でしょう、人間が創ったかっちりしたイメージがあるじゃないですか。あれを、このだるまを見てもらえば分かりますけど、崩しようがないんですよ。崩しちゃうと、河童とか天狗にならなくなっちゃうということで。それがすごく描くのが面倒くさかったのも、実際にあるもの、だるまって、ものがありますよね。ということで、だるまが一番描きやすいかなと。とは言っても、だるまで描けて言っても、全然出てこないわけですよ。どうしたらいいかなあってことで、このとき思いついたのが、頭に花が挿してあったシーンありましたよね。ああいうような感じで、本来の使われ方とは全然違う用途で使われてしまっている、勘違いをした外国人が作る絵がありますよね。日本のもので。その写真とか絵を見ると、すごくきれいな、かっこいい、何かきれいな使い方をしてたり、逆に面白いなというような見え方をしているのがありますよね。こういうシリーズで、僕が外国人になったつもりで、だるまをどんなふうに扱ったらかわいそうに扱えるかな、というシーンをいろいろ集めて、そのシーンを並べて、お話は後でくっつけていきました。僕は、絵本は、いつも大体絵が先行ですね。絵が先行で、それを何となく組み合わせながらお話を作っていくのが多いです。

次はですね、『あるひこねこね』というやつを今から読みます。(『あるひこねこね』読み聞かせ) うまいこと行きますよね。熊，牛。このへんからちょっと無理が。りす，くも。どうやって創ったのかっていうそういうのがあるんですけど。さようなら，ある日……，と続いていくお話ですね。これのコメント何かあるかなあ。宇宙人を描きたかったんですよね。何か，B級映画に出てくる本当にうそっぽい宇宙人を描きたくって，ただそれだけ，というのがあるんですけど。ふだんはですね，読み聞かせということを特別意識せずに，ひたすら自分が面白く創れる内容を目指して創っているんです。

こういう読み聞かせとかで，何かいっしょに見ている人たちが盛り上がる内容のものを創ろうかと。最初にあった「こねこねこねこね……」，まあ，同じ言葉が連続しますけども，あそこはですね，本当に自由度を高くできるように，その人の，読んだ人のリズム，読んだ人の感覚で，次のページへの一歩っていうのをうまいことやると，もうドッカーンなんですよ。でも，実際子供たちは笑ってくれますよ。それをちょっと意識しながら創った絵本でしたね。これは，編集者と，繰り返して何かのもの，言葉に変換するものっていうことで，探したんですけど，これでいっぱいでしたね。これ以上なくって。じゃあ，どうするかっていう。「ほかにもたくさん」で処理したっていうね，それは，各自各々考えてくれっていうそういう，自分で考えろっていう深いメッセージがあるんですけど。こういう何か繰り返しのお話だったり，このへんのやつも行ってみましようか。

『みて!』。(『みて!』読み聞かせ)「みた？」こうね，静かに終わっていくっていう……。そうなんです，読み聞かせには不向きな絵本なんですけども。これ，元々，雑誌の8ページのものを，後ろを長くしたもので，最初のピョーンと飛び込んでって，戻ってきて「みた？」ってどこまでが一つだったんですよね。それで8ページ。それまでの絵本の創り方，僕の中では，絵本は32ページが基本なんです。32ページの中で始まって終わる，というところで，いきなり8ページで創れと言われても，全然ページ数が足りないんですよ。そこで，何か長ったらしく文章をたくさん付けて，無理矢理に終わらすというふうにやるよりは，もう文字をなくしてしまえ，と。本当4コマ漫画みたいなノリのパパパパパンと終わるような，そういう勢いのある作り方をしようというのを，ファミレスで思い付きました。環八通りのファミレスですが，あれを思い付いたとき，ああ来たとき，ああこれで終わったとき。この8ページの絵本を創るのは大変だったんです。これは絵本館という出版社から出ているんですけど，「これを是非一冊にしませんか。」ということで，後ろを足しました。戻ってきた後に，たこが怒ってまあ，ワーチャーワーチャーするという話の終わりを付け加えたという絵本ですね。『みて!』。僕の本の中では文字が一番でかいんですけど，これ。こういうふうに開いてみると，実はたこだったというね。ここにもちっちゃいね。本の袖って，このくりんって折れ曲がっているところですね。何かしらちょっとね，そういう遊びもちょいちょい入れつつ，楽しい絵本創りをしていますね。

途中でまた絵本に戻るかもしれませんが，絵本は，大体こんな感じの，いわゆる，何て言うんでしょうか，読んだ後にほろりと涙がこぼれるとか，まあもしかしたらこぼれる人もいるかもしれませんが，そういうのではなくて，ただ面白いなという絵本をたくさん創っています。

僕も絵本作家になる前は，やっぱりそういうの懂れるじゃないですか，優しいやつ。で，考

えてみたんですよ、涙がこぼれそうなやつを。そしたら、全然つまなくて、一日で諦めましたね。ああ、僕は向いていないと。人には役割があって、僕はこっち方面だということです。

(スライド写真)これがアトリエです。アトリエというか、仕事場ですね。自宅とっしょにセットになっているところなんですけども。まだ本棚の上はガラガラなんですけど。今は机の配置とかは変えているんですけど、こっちに座ったりこっちに座ったり、何かこのへんに座ったりとか、いろいろやっていますね。

(スライド写真)これがさっきの『みて!』ですね。これ、『みて!』。さっき、雑誌の方で8ページっていうふうにお話ししましたが、最初はですね、「開き」が違ったんですよ。絵本って、右開きと左開きとあって、要は算数の開き方と国語の開き方が別ですよ。元々は雑誌なので、国語の開き方だったんですよ。それを、絵本って、算数の開き方なんですよ、大体は。それで、実際原画と絵本の方を比べると、全くの反転になっているんですよ。やっぱり、絵をそのまま逆に並べたとしても、流れがちよっと違うということで。この絵というのは、多分、絵本の方ではひっくり返ってるということになりますね。

(スライド写真)これが、『だるまだ!』の校正紙。これはパレットですね。パレットって、あの、小学校の頃、二つ折りの、部屋がある、プラスチックのやつですよ。あれって、洗うのすごく面倒くさいじゃないですか。水かけると、バーッときますよね。毎回洗ってられないので、いつも使ってるの、ペーパーパレットって紙でできたパレット、^{はつ}撥水の紙で、ちょうど何て言うんですかね、メモ帳みたいな感じで、使い終わったらペリッと一枚めくって捨てると。そうすると、また新しい真っさらなパレットが出てきて、また使い始めるという感じで使えます。絵の進行具合に合わせて、絵の具をちょいちょい足していって、こねこねこねこねと余りこう大量に絵の具を一個作って、この、例えば、このずうっと出てくる女の子の顔を同じ色で塗っていく、というよりは、一枚の中での女の子の顔のバランスを見ながら描いていくので、こっちは普通の顔なのに、次のページは赤ら顔とか、というのはよくあるんですけど、僕の場合は許してくれることが多くて。

(スライド写真)これが『まねきねこだ!!』。すごいでしょ、これ。さっきが青色で、これ、赤色で。「まねきねこです。まねきねこがそれからふってきました。」っていうところから始まるんですよ。で、どうなるか、っていうお話なんですけど。

(スライド写真)これ、僕の名前書いてありますけども、僕が書いたわけではなくて、友達の子供が、僕の絵本だということを知らずに、小学校か何かで読んで、その感想、感想って言うか要約ですよ。『でっこりぼっこり』っていう絵本があるんですけど、巨大な人がマラソンを突然するから、足形に穴が空くんですよ。その穴を利用して、いろんな人が、何かプールにしたりだとか、なんだかんだいろいろ利用するんですよ、このへこみを使って。でも、地球を回っているんで、半周回ってきたら、これ、説明難しいな。読めば分かるんですけど、これを読んで納得してください。あらすじ。「巨人がある日マラソンを始め、地面に足跡がいっぱい。そして、その穴は、いろいろなことに活用されて、その頃、地球の裏側で、わあ。」これ、一番大事なの、この「わあ。」なんです。これ以上のいいあらすじはないなあと思って、うれしくて、今日、持ってきちゃいました。

(スライド写真) これはですね、実はこれ、友達の結婚式のウェルカムボードとして描いたものなんですよ、頼まれて。よくあるじゃないですか、新郎新婦の幸せそうな二人が並んで、後ろがハートマークになってて、何か、にこって笑ったやつ。あれ家で飾れないじゃないですか。もしやるんだったら、いつまでも家で飾れるものがないって言うふうに思って、二人の好きなものっていうのを盛り込みました。海が好きだ、カニが好きだ、ダイヤが好きだみたいな、ビールが好きだとかそういういろいろ混ぜ混ぜに入っただけの絵ですね。文字も何も入れないって言う、そういう優しさ。

(スライド写真) これはですね、「もののけ」をテーマに描いてくださいとお題を渡されて、「どろのどろんこ」っていうもののけを作ったんですよ。これ、もののけですね。これ、「振り」と「落ち」っていうそれだけです。どろのどろんこなんて、どうでもいいって言う。

(スライド写真) これは、ヘルメット。ヘルメットは事務的な物なんで、ちょっとでも楽しくしようということで、こういうイラストを描いたりとかですね。

(スライド写真) これ、箱なんですけども、パカッと開いたら、絵がいっぱい描いてて、これ、新宿なんですけど、新宿のアルタのすぐ近くの交差点なんですけど、そこで、段ボールと、この半立体になってるのが段ボールなんですけど、段ボールと絵の具をこう、ぺたぺたやったり貼ったりとかね、そういう感じの。

(スライド写真) これはですね、僕、子供が5年生と3年生といるんですよ。二人とも女の子で。上の子が、多分1歳か2歳の時に、まだ頑張ってたね、僕もね。誕生日のクラウンを作ってあげるよということで、紙をくるっと一周やって、上をジョッキジョッキジョッキで適当に切ると、このシルエットが出てくるんですよ。このシルエットを頼りに絵を描いていくということで、これ、一周ぐるっとこんな感じになるんですけど、これはお父さん頑張るところですね。

(スライド写真) これは、チーターです。『チーター大セール』という面白い絵本がありまして、それに出てくるチーターなんです。子供が夏休みの宿題に粘土を作っていたので、僕も参加したっていう、そういうものですね。さすがに、これ持ってったら怒られますよね。もしかしたら納得されるかもしれませんが。

(スライド写真) これが、ちょっと前に僕の中ではやっていた粘土遊びなんですけど、この粘土は実は、オーブンで焼くと、20分30分焼くと、プラスチックになるという粘土なんです。家で好きな形のプラスチックができます。ただね、めちゃくちゃ固いんですよ、親指が痛くなるくらい。人間作ろうとするじゃないですか、大体。胴と手足と頭を別々に作って、こういうふうに、ガチョーンってやりたくなるでしょう。そうすると、くっつかないんですよ、あまりにも固過ぎて。だから、ほんとに、ブロックから形、こねこねこねこね作っていくんですよ。固いと、意外とここまでできるという。こういうの作ったり、こういうの作ったりというようにですね。着色すると、全然それ感がなくなって、面白くないんですけど、こういう感じですね。こういう、何か島に男が立っているとか座っている、みたいな。これね、全部本当に小っちゃくて、全部これくらいなんです、一時期ずっと遊んでいたんですけど。

(スライド写真) これは猫。これもね、一つの形からこうこねこね切り出してって言うか、形を作ったとかそういうようなものですね。

(スライド写真) これは、絵本に出てくるお化けを二体。ああ上手。あのお尻が上手ですよ。ぷりっとな。ていうのをやってたら、子供が来て、それぞれに値段を付けてくれたものな

んです。これ、さっきの、「お尻」っていうこれタイトルですね。702円。お買い得ですよ。これ「水泳」。これ、5,000円。これ、さっきの島のやつなんですけど、彼女には、どうやらこれが、ふわっとしたドレスに見えたらしくて「ドレス」。10,000円。「お尻」安いですよ。勝手に値段付けられちゃったっていうね。



(スライド写真) これ、こけしですね。こけしっていうと、大体これが一般的なやつじゃないですか。でも、地方によって、いろんな形があるらしくてですね。そういう形になった理由もちゃんとあるらしいんです。今説明するのは大変なので、しません。いろんなこけしの形からですね、これは、女の子が頭に団子を作っているように見えると思って。普通のこけしっぽく作らないのがひねくれて

るんだろうなと思うんですけど。こういうものに絵を付けたりとかですね。

(スライド写真) あと、これはですね、ここ抜いてあるんですよ。ちょうど顔がはめられるようになってまして。これはですね、群馬県だったと思うんですけど、美術館で若手絵本作家が寄せ集められたというか、いろんな方がいて、例えばミロコマチコとか、tupera tuperaとか、そういう有名な方たちと一緒に交ぜてもらってですね、結構敷地のエリアが広く、美術館なので、絵本の原画以外にもほかにも置けますよ、みたいな感じだったんですよ。それで、パネルを買ってきてですね、こういうものを置いたら、大人がやるやる、子供はやらないやらない。子供に「持ちなさい。持ちなさい。」と言って、「撮るから、動くな、動くな。」っていうのは、よくいましたよ、ていうふうによく聞きましたね、後でね。大人がみんなやりたがるっていう。

(スライド写真) これはですね、まだマンションに住んでた頃なんですけど、七夕、もうすぐですよ。七夕のときに、笹を家の中に持ってくるのは大変なので、絵が上手なので、ちょっと笹を描いてみました。その紙に貼って、雰囲気を作る、このへんが絵本作家っぽいですね。

(スライド写真) これはね、まあすてき。これ、SNSにアップしたら、いろいろありましたよ、反響が。これ、幼稚園で使うときの、幼稚園っていうから、もう何年も前の話なんですけど、幼稚園の先生が、右と左に違う絵を描いてくださいって言うんですよ。絵を描けてって言われるんですよ、名前じゃなくて。子供がちゃんと「右足は何々、左足は何々。」っていうふうに、自分で右と左が分かるようにということで、ちょっと絵、得意なので、描いてみました。熊とキリンですね。

(スライド写真) 最初の紹介でもちょっとお話ししていたんですけども、相模女子大学というところで絵本の授業をやってるんです。授業は全体で15回あるんですけど、その15回の中で、各自絵本を一冊創るという授業なんですよ。この授業は、「絵本表現」という授業なんですけれども、みんな大体単位取得のために取るので、絵本、そんなに好きじゃない子も結構いるんです。本当に単位だけがほしいっていう子もいるんですけど。ただ、みんなちゃんとラフを作って、お話を創って、絵を描いて、それをパソコンでいろいろカチャカチャカチ

ヤカチャってやって、紙に出力して、製本するところまで作るんです。本当に一冊創るんですけど、全然絵本に興味のない子の方が、面白い絵を出す。お話もそうですけど、創るんですよ。全部で15回なので、授業のたびにやり取りをしていると、先週と違うことをしている子がいるんですよ。先週まですごくよかったんですよ、その子。で、今週「あれ、もうつままないからやめた。」って言うんですよ。あれもったいなかったのにと感じて、その授業の終わりになると、前よりもいいやつをどんどん創るんですよ。本当にねえ、ちょこっとでも嫌になったらすぐ乗り換えて、いいものを更に創るっていう、そういう若さっていいですね。やっぱりでも、諦めも必要かなと思いますよね。大変なんですよ、これ。本当は32ページはさすがに創れないので、大体10ページ前後の絵本を創るんですけど、それでもそんな、みんな絵、描き慣れたるわけではないですからね。何ならお話も創ったこともない人がほとんどなので、でも、ちゃんとかういうふうに仕上げてくるんですよ。

僕がふだん図書館とかそういうところでやっているイベント、ワークショップのものを紹介したいと思います。まずは見てもらいましょうか。

(スライド写真) これね、大体大きさ、3メートル4メートルぐらい、紙ですね。横はどのくらいかなあ、ちょっと大きめの紙にこうやって、チーターを描くんですよ。さっき言った『チーター大セール』っていう絵本がありましてですね。最初におばさんが、「黒い点々の模様を売ってくれ。」って言う。で、その点々を売り、体の黄色も売り、という、全然チーターとは程遠いんですけど、派手な、ちょうどこんな感じですよ。黒い点々の代わりに、売り物のペンでいろんな色を塗ってみてっていう、そういう派手なチーター、派手派手チーターを作るとい、そういうワークショップです。そこで、子供たちに、紙コップと筆と絵の具を持ってもらって、「点々を描いてください。」「絵の具は混ぜて、好きな色でいいですよ。」というふうにスタートするんですよ。スタートして、やり始めるんですよ、どんどんどんどん。もう、ストップと言わない限り、ずうっとやりますからね。

そのうちですね、面白いことに、最初ね、ルール守って点々なんですよ、大体そこからちょっと冒険し始めて、星形とか、ぐるぐるとか、そのへんから始まり、どんどん派手になっていくんですよ。結局、塗っちゃったりとか、そういう子もいるんですけど。そのへんは様子見てやってるんですけどね。これがね、「派手派手チーターを作ろう」という、最初のワークショップ。僕の中でも、ちょっと実験に近いような感じだったので、止め時が分からないんですよ。どこでやめたらいいかっていう。で、この状態になるまでどのくらい時間がかかるかっていうと、そんなに時間かかんないんですよ。長くて15分ぐらい。20人もいないかな、十何人でもいくかな。でも、どんどん打つんですよ、点を。絵の具がなくなったら、また、新しい絵の具をちょっともらってトントントン。

どうしても、自分が「絵描くのが下手だな。」って思っていると、手、進まないじゃないですか。ただ、こういうドットを打つだけっていうそういう、半分作業、それプラスふだん使い慣れてないだろうなっていう、そういう絵の具と色と、というそういうのが混ざると、何か点を打つだけでも楽しくて、ちゅうちょなくどんどん打ってくれるんですよ。止め時が分からず、足とか、こんなんってくるんですよ、これ。このへんとかね。

そのうち、こう、ドロッピングとかし始めるんですよ。これ、「あーっ。」てね。これは

これできれいなんですけれどね。一般的には、「あーっ。」ですよ。「あーっ。」という声ね。大変でしたね、これ、掃除ね。本当ここまで30分かかってないですよ、やり始めて。

(スライド写真) これまた別の場所で、北海道でしたかね。この頃は、最初にチーターを描いてですね、そこに、みんなで点々を打っていく方法で。このイベントは、繰り返しているところやっているんですけども、みんなは新鮮でやってるんですけど、やってる僕は飽き始めちゃって。

(スライド写真) これはね、写真撮ろうとしたら、邪魔が入るんですよ、これ。どけて言ってもどかないんですね。こういう記念写真撮ったりして。この頃も、最初にチーター描いたんですけど、こんな感じで。最初に絵の具と紙コップ用意してもらってですね。「何色。」って言ったら、コップにチュッチュッチュッチュッ入れてくんですよ。どうしても紙コップなので、混ざっちゃうんですよ、色が。それも狙いの一つではあるんですけども。そのマーブルさ加減を楽しむということで。各自、筆だけは持ってきてって感じで用意してもらって。とにかく、紙コップは、もう気に入らなかつたら次交代っていうふうにしてもらって。どんどん使ってもらってって、こんな感じですね。基本的にはこれ、子供限定のイベントではなくてですね、大人も参加O.K.なんですけど、あんまりやってくれないんですよ。大人は見るだけ、みたいな。でも、時々描いてくれる方もいて、そういうのを見るとちょっと楽しいですよ。

(スライド写真) これは、きれいになんかバラバラになってますよね。奥様が、こう、草原を描いてくれる、こういうイベントもやって。さっきみたいにちょっと飽きてきちゃって、今度は、僕の中で、もう先に点々を打ってもらおうと。きれいですよ。線で囲まれた空間がない分、本当に点々を自由に打ってくれるんですよ。そうすると、色の、これ、やる所によって色の感じが全然違うんですけど、こういう星みたいな感じ、これいいですよ。ハスみたい。こういう感じで。打った後に、その点々の具合で、僕がチーターを描く。というふうなので、こっちの方が、自由な形のチーターがどんどん出てくるんですよ。だから、最近、これを中心にやっています。

(スライド写真) 出ました。思い出の一冊。はい。「絵本作家の日常 ～思い出の一冊～」というのに行きます。

僕が小さい頃好きだった絵本ですね、いきなりですけど。『ピッキーとポッキーのかいすいよく』という絵本です。文が嵐山光三郎さんで、絵が安西水丸さん。安西水丸さん、亡くなってしまいましたけど、つい最近。僕はこれ、小さい頃に好きだった絵本なんですけど、話の内容は全然知らなかったんですよ。飛んじやったので、また後で話します。覚えておいてください。『ピッキーとポッキーのかいすいよく』。

(スライド写真) これもまた、違ったワークショップなんですけど、これは、ボードの真ん中を切り抜いてですね、僕の絵本の中に『みんなにゴリラ』っていう絵本があるんです。顔のところを、ゴリラの顔のところをくり抜いてあって。前のページでお母さんが何ちゃらかんちゃら言っていると、次のページへペリってめくると、ゴリラがかぶさるんですよ。顔には、お母さんが映ると、お母さんのゴリラがウホウホって言う、その繰り返しの絵本があります。そ

こからの流れでできたワークショップです。ボードに穴を空けて、周りは毛糸とかセロハンとか、いろんな色紙とか、そういうの用意してもらって、ペタペタと何でもいいので作ってもらいますよね。それを、顔ではなくて、周りの風景で顔っぽいものを作っていくと。こういう感じ。だから、これは、作って写メを撮って出来上がりなんですよね。

その写真をですね、送ってもらおうというそのイベントを、愛知県の昔の愛知万博の跡地にある何とかってところでやったイベントなんですけど。この日はお父さんと子供限定イベントみたいな感じで、お母さんは参加しちゃだめ、お父さんと子供だけっていうイベント。お母さんたち、ここ、説明の時なのでまだお母さんたちいますけど、始まったらお母さんたちがここに並んで、この建物もすごいでしょ。ヤドカリみたいに、らせん階段。お母さんたちが、ここにバアッと並んで、上から指令を送ってる、「そうじゃないでしょ。」って。「ちゃんとやんなさい。」って。お母さんたち、うるさかったですね。お父さんたちは無視して制作し続けている。こんな感じ。お父さんと子供が一緒になって。一緒になってって言っても、一緒のところで作っていくんです。子供は、もう本当に迷いなく作るんですよね。実際の制作時間は20分か30分程度。材料はいっぱいあるんで、好きに使っていいですよ、はいどうぞ、って言って。もう迷いなく、どんどん作るんですよ。説明したのは、その場でですよ。「一日、何作ろうか。」って考えるじゃないですか。なのに、何の迷いもなくトントントントン子供は作っていくんですよね。トントントントーンって作っていくんですよ。

お父さんがこだわるんですよ、細かいところに。いっぱい作ってますけどね。お父さんがこれなんか、ずっと毛糸をひたすら丸めてちょんちょんくっつけていくっていう、しかも、結構小さいサイズでくっつけていたり、こんな感じで。あー細かいですね。「お父さん、細かい。」って。「ああ何か、何かなってる。」って、まあ途中で何かこういうほほえましい写真撮ったりとか。

出来上がったら、「もう写真を撮りに行っていいですよ。」っていうことで、実際に写真を撮るまでが作品なんですけど、それを、やっぱみんなに見せたいじゃないですか。見せるにはどうしたらいいかなあっていうことで、普通にカメラっていうよりは、携帯の写メを送って、あるアドレスに送ってもらう。そこにアドレスで集まった画像ですね、その場のお母さんたちがいるスクリーンに映します、という方法を採用したんですよ。これが



大変でしたね。作り終えた順番に、みんなやり始めるんですよ。まだ作ってますけど。何かやっていますけど、こんな感じでね。実際、顔もはめられると。何かやっていますよ、これ。

ここに、このパソコンに全部集めてもらった、アドレスに全部送ってもらったんですよ。そしたら、来る来る。もう受信してるんですけど、ずーっとグルーって回ってて、バーッと写真が送られてくるんですよ。「もう何かパンクしちゃうよ。」っていう喜びの顔ですね。「全然受信できないよ。」って言ってましたね。実際、この施設の中で、お父さんと子供が一緒になって、「あそこが顔になるんじゃない。」「こっちが顔になるんじゃない。」みたいなことを言いながら、ともあれば、もうお父さんの方が夢中になって、一人でやっていると、こんな感じ

で。この時、携帯の写メ使って、何か楽しく、ほほえましい姿は見えましたけどね。

(スライド写真) これはまた違うもので、黒い紙をビリビリビリって適当に切って、ひげとか眉毛を作ろうっていうふうな、こういう感じに作ろう、みたいなことをやったんです。多分この子だと思うんですけど、口ひげが真一文字のひげを作って、あごひげが「介」みたいな字だったんですよ。こういう「介」。それを見たときに、漢字の「一」と鎌倉の「倉」みたいな字に見えたんですよ。別に、その子に言うわけでもなく、何となく「何か『一倉(いちくら)』って読めるねえ。」みたいなことを話してたら、そこの図書館の人が、ハッて振り向いて。びっくりしたような感じで。後で聞いてみたら、何かと思ったら、「あの……、今日の打ち上げの場所は、『イチクラ』っていうんです。」って。これ、全く僕、知らされてないんですよ。すごくないですか、これ。「イチクラ」を導いたひげなんですけど。「何それ。」って。こんな感じでね、凸凹のひげを作ったりとか。これだけでもねえ、面白かったですけどねえ。

(スライド写真) 戻ってまいりました。『ピッキーとポッキーのかいすいよく』。これがページを開いた一ページ目なんですけれども、こっちに全体のマップみたいなのがあって、こっからスタートなんですよ、お話。「なつになりました。」からスタートなんです。

僕が一番好きだったページはここです、何が好きかって、この二人よりも、この人が好きなんです。この、何なら、これ。この、何て言うのかな、結構激しい流れじゃないですか、この感じ見ると。この大きいかだの、この細長い、細いロープの、こんな小っちゃいいかだのここに乗っている、いつ転覆するかも分からないこの姿を、このねずみをですね、自分に置き換えて。生か死か、みたいな感じで、いつ転覆するかも分からない感じを、頭の中でぐるぐるぐるぐる想像していて。ずーっと、この絵本は、このページしか見ていないんです、僕。大人になって、初めて話を分かったんですよ。あ、こんな話だったのか、と。ほかにもこんな絵があったのか、というぐらいこの絵が好きで、ずっとこの絵本、というよりか、この絵が好きで、ずっと見てましたね。『ピッキーとポッキーのかいすいよく』。

(スライド写真) これは、『人類以前』という、僕は聞いた話なんですけども、『人類以前』という、恐竜の初めての図鑑なんです。描かれてあるのは、今はね、CGとかでバーって作っちゃってますけども、この頃の恐竜の図鑑がですね、もちろん描いてあるんですけども、この図鑑が大好きで、ずうっと何回も見てました。怖いでしょう？「ザ・恐竜」ですよ。何ですか、あのT-R E Xのふわふわ感は、と。最近の知ってます？何か派手な感じになっちゃって、おしゃれな感じになってますけども。これですよ。怖いなあ、と思いながら、ずっとこう見てたんです。この海の様子とか、ここに放り出されたらどうしようとか思いませんか？これ自分だったらどうしようとか。まあ、逃げられたとしても、ちょっと高いなあ、とか。

ここが一番怖いんですよ、このへんが。ここかな。ちょっと透けて見えるんですよ実はこれ、本当の絵は。ああ、怖い。もう僕、これの見過ぎで、海に入れたいんですよ。「絶対いる、ジョーズが絶対いる。」って思って。泳げはするんですよ。僕は、高校、水泳部だったんで。泳げはするんですけど、海に入れたい。足が届かないところは行きたくないんですよ、怖くて。

(スライド写真) いろんな絵本見てるんですけど、絵本以外のものでも影響受けることも結構ありました。これなんか特にそうなんですけど。これねえ、どっかの片田舎なんです、日本ではないどっかの。この写真が、実はアート作品でもあるんです。ふだんは、この道全然車通

らないんですって。通らないって言うか、こんな渋滞なんかしないはずの道なんです。これをどういうふうにしたかって言うと、わざわざ、車を一台一台埋めていったわけではなくって、こんな感じ。すごい渋滞でしょう？こんなですよ。これはどういうふうにしたかって言うと、新聞か何かの記事に、「何月何日に、どこどこでバーベキューをします。」っていう宣伝を出したんですって。「無料です。」っていう。「無料です。」でこんなに来る？っていう、そういう作品。本当に、その広告を出して、この行列を作ったっていう。これですよ。面白いことを考えつく人がいますよね。「そんなにみんな、バーベキュー？」とか思いますけどね。そのバーベキュー、うそかって言うと、そうではなくって、実際本当にやってるんですけど、結構小規模、みたいな。こんな感じなんですよ。

(スライド写真) これ僕です。高島那生です。こっちが、よしながこうたくって言って、絵本で言うと、『給食番長』ですね。こちらは、鈴木のりたけさんっていう、『しごとば』とか、そういうリアルなタッチの絵の方ですね。この人が、新井洋行さん。『れいぞうこ』とか、合子ごうしの小っちゃい絵本のページをめくると冷蔵庫の中が見える、みたいなそういう絵本、小っちゃい子供向けの絵本が得意な作家さんで。

これは何かと言うと、絵本作家って、地味な生活を送っているんですよ。何なら一日中そんなに家から出ないとか。どっかアトリエがあるわけでもないの、朝起きて、犬の散歩して、帰ってきて、シャワー浴びて、絵描いて、子供帰ってきて、みたいな、そういう結構淡々とした毎日なんです。そうすると、あんまりこう、同業者と会うとか、そういうのあんまりないんですよ。やっぱり、一番会うのは編集者とかっていうことになるので、ここらでひとつ、同年代で集まろうではないかということで、大体みんな同じ年なんです、40前後。40前後で、まだ若手とか言われるんです。幸せなんですけど。

僕がデビューしたのは25の時なんですけど、その時は本当に周り同じ年の人はなくて、最近ようやく、わらわらわらってみんな出てきたんで、お友達が増えてうれしいんです。時々会って、飲みに行ってたんですが、その飲み会にですね、講談社の編集者がにおいをかぎ付けてやってきまして、何か作ろうではないかと、みんなで合作を作ろうではないかということになり、この4人で『おえかきしりとり』という絵本を作りました。

実際に、中身は「絵しりとり」ですよ。絵しりとりで、みんなでバトンタッチしていくんですけども、実際、ラフは描いて、それをスキャンして、みんなにメールするのね。みんなに一斉メールをして、次の人が、まあ、順番は決まってるんで、次の人がその絵を見て、また新しい絵を描くっていうのを、2年繰り返したんです。2年ですよ。2年繰り返してできた本なので、機会があったら、見てみてください。これ持ってくればよかったんですけども。本当にね、絵だけのしりとりなんです。ね。

(スライド写真) これは、できたときのサインですね。限定何冊かで、みんなでサインすると。そのサインも、一応、四つでぐるぐる回るしりとりにしてあると。そういう豪華本を作りましたね、この時ね。

(スライド写真) これが神保町のブックハウス、絵本屋さん。絵本専門店があるんですけど、そこで原画展をしたときの様子ですね。これもまた、違うメンバーです。よしながこうたく。のりたけさんもいますね。これは、tupera tuperaの亀山君ですね。これは、『おこだでませ

んように』の石井聖岳さん、その方ですね。これ、私。

これはですね、さっき言ったブックハウス神保町って本屋が閉まってしましまして、結構人気のある本屋さんだったんですけど、閉まってしまいました。でも、また再オープンすることになったんですよ。ブックハウスカフェと、中のここに椅子があるんですけども、そこで今度



はカフェ、飲み物が飲めるようになっていうふうにちょっと造り替えて、そのプレオープンイベントということですね、この四人が集まって、それぞれ何かみんなを盛り上げるイベントをしました。今は、そういうカフェができたので、その本屋さんは、絵本作家は打合せにそこを使うとかというのは結構あって。もしかしたら、その本屋さんに行けば、作家に会えるかもしれません。

(スライド写真) ああ、かわいい。このお猿さんと犬、何ともいいじゃないですか。この写真が、ずっといいなあっていうのがあってですね、この写真を元に絵本を創ったんですよ。(スライド写真) これ、『セッセとヨッコラ ヒョゴーどうくつのたんけん』。全然性格の合わない二人が、思い起こすというか、やり取りのある絵本です。こういう、ある一枚の写真からできる絵本もあるということですね。これね、文章長いんですよ。なので、絵だけザラザラって行きますよ、説明しながら。「探検。あーあ、真っ暗だ。ねえねえねえ、起きて起きて起きて。え、何、めんどくせえなあ。懐中電灯じゃん。ねえ、これ洞窟みたいじゃない、洞窟？あ、その話いいね。」っていうこの子の想像から始まるお話なんです。「きっとその洞窟はさあ。」って言って、「奥地にあってさあ。」っていうこの子の妄想が広がるんですよ。これ、全部妄想です。「ここでさあ、どんどん入ってさあ、こんなところがあるはずだよ。」どうしようってったら、いろんな、こんなゴムボートがあることにしよう、もう妄想ですから。ゴムボートがあることにしようっていうね。で、出てくるんです、急に、ゴムボートが。出てきて、「わあ、流されるー。わあー、ヨッコラー。」って言って、ヨッコラが流されちゃうんです。「ヒョゴーヒョゴー、何か変な音がするなあ。ああ怖いよ、怖いよ。」って言ったら、ヨッコラっていう猿が、ヒョゴーヒョゴーっていういびきをかいて寝てた、というそういうお話ですよ。これね、どこも行っていないんですよ、実際。布団の中だけの話っていうね、そういう絵本。じっくり読むと、楽しい絵本もありますよ。

今日は、せっかくなので、絵本をどうやって作っているか、さっきもちょっと説明しましたが、ちょっと分かりやすく。

せっかくなので、皆さんに協力してもらいたいと思います。さっきお話ししたように、僕、絵本を創るときに、絵を中心にして考えるんですよ。どういうふうに絵を創るかって言うと、最近気になっている、描きたいなっていうシーンがあるとしますよね。例えば東京タワーを描きたいなあ、とか、ハンバーガー描きたいなあとか、こういう人描きたいなあとか、あるじゃ

ないですか。これを、ページに割っていくんですよ。大体、絵本を創るときに、A4の紙に升目をいっぱい書いて、ページがどういうふうに移り変わっていくかっていう感じで、全部で15升作るんですよ。15升書くと、32ページになるんですよ。こんな感じで作っていくんですよ。はみ出ちゃってますけど、例えばこのところここう、人を描こうって、ここにタワーを描こうって。入れ具合は適当ですよ。始まったら、3ページ目にハンバーグが出てくるんですよ。で、3ページ目にハンバーグが出てくるお話を創るんですよ。で、ハンバーグ出てくるでしょ？で、7ページ目にタワーが出てくる話をつなぐんですよ。むちゃくちゃでしょ？そうやってできているんですよ。

これのいいところは、頭を慣れさせないと言うか、どうしても最初からお話を創るときって、「昔々」って言ったら、次に出てくるのは「あるところに」というように、頭でそう決まっちゃってるんですよ。絶対出したくないな、と思っても出てくるものなので、それを、どうにでもつなげられないようにしておいて、創っていく。というふうになると、先が読めない。先が読めないのがいいのか悪いのかっていうのは別として、お話を楽しく、僕はこれの方が創れるので、こうやって絵本創ってるんですよ。

今日は、これを創るのはちょっと大変なので、5見開き。見開きっていうのは、絵本をペラ一つとめくったこっちとこっちだけの見えるところを1見開きって言うんですけれども、絵本は、その15見開きと片ページずつで、32ページなんですね。今日は、その5見開きを創っていかうかと。1, 2, 3, 4, 5となるわけですね。皆さんに文章創ってもらおうかって思ってます、これから。そのヒントとなるのは、あ、い、う、え、おっていう各ページの頭文字をそれぞれ設定してですね。

というところで、じゃあ、「あ」は最初何が入るでしょう。というところで、誰か言ってくれる人はいませんか。これ言わないと、こちらから勝手に「どうぞ。」っていうふうになりますけどね。大丈夫ですか？じゃあ、下りてくしかないですね。じゃあ、目を伏せた方にしようかな。最初「あ」から始まる何の言葉でもいいです。はい。

(「ある日。」「ある日」, 分かりました。「ある日」, 来ましたね。はい。「ある日」で次のページに行くのはちょっと短いので、ある日、じゃあこの次、ある日に続く何か。ある日、「誰が」にしましょうか。はい、私こそ言いたい、という人。

(「あひるが。」「あひるが」。重ねてきましたね、「あ」で。はい、何をした。さあ、言ってくれてかまわないんですよ。そのまま、どんと言ってください。

(「散歩。」「散歩」。「散歩した。」, はい。ほらできた。「ある日、あひるが散歩した」。最初のページできましたね。

じゃあ次、「い」。「い」から始まる。次、誰か言ってくれる人はいませんか。……おかしいな、こないだ小学校でやった時、当てる方が大変だったんですけどね。誰かこの、じゃあちょっと黙ってみようか、この静寂が我慢しきれなくなった人が負けっていう、そういう……。誰かいませんか。我こそは、とか。一回ここで言ったらね、次当てられなくて済むっていうことがありますからね。どうぞ。はい。

(「田舎。」「田舎」, いいですね。「田舎で」。はい、この次、何にいきましょう。さあ、誰でしょう。「犬に会いました」。ザアッていきましたね。みんな重ねてきますね。「ある日、あ

ひるが散歩した」,「田舎で犬に会いました」, ああ, いけるいける, いけますね。

さあ, 「う」いきましようか。さあ, どなたかいませんでしょうか。

(「運動会。」)「運動会」, 来ました。じゃあ, 次。「運動会で」にしましようか。さあ, 続き, どうでしょうか。

(「お弁当。」) お弁当「を」? 「が」? 「と」? 「に」? 「お弁当を」, うん, どうした, さあ。

(「ぶちまけた。」)「ぶちまけた」。「田舎で犬に会いました」, 「運動会で, お弁当をぶちまけた」。うん, なかなかシュールな感じがっていうね。

さあ, 「え」いきましよう。さあ, 「え」ですよ。「え」, どうでしょうか。全然続き考えなくていいですよ。僕, 絵でどうにかしますから。プロですから, 僕。うまくいかないときもあるかもしれないですけど。「え」でいきましよう, 「え」。どなたか, 我こそは, 「え」です。

(「円盤。」) 円盤? ……ぶちまけた, うーん, 円盤。はい, 続き。円盤「で」? 「に」? 「が」? じゃあ, 円盤……。うーん, 汗かいてきますね, これね。「運動会で, お弁当をぶちまけた」, 円盤「が」, にしましようか。さあ, どうした。

(「落っこちた。」)「落っこちた」, うわあ, どんどん起きるなあ……。

さあ, 締めですよ。「お」。どうでしょうか。何にしましよう。誰かいらっしゃいませんか。

(「おまわりさんが。」)「おまわりさんが」, はい, どうした。

(「驚いた。」)「驚いた」。

さあ, こっからですよ, 絵は。「ある日あひるが散歩した。田舎で犬に会いました。運動会でお弁当をぶちまけた。円盤が落っこちた。おまわりさんが驚いた。」ああ, このへんなんかうまくいきそうですね, 何となく。あれ, 分からないですか? 「ある日あひるが散歩した」って言うんだから, 最初は普通でいいんじゃないですか。「ある日あひるが散歩した」だから, 地面があって, あひる。誰がどう見てもあひる。

「ある日あひるが散歩した」, 「田舎で犬に会いました」。なるほど。ということは, 最初は, 「田舎で」ってわざわざ言ってるってことは, 最初は都会だったわけです。ビルが建ち並ぶ都会で, こうやってあひるが散歩してた, ってことですよ。文章どおりに, 僕は素直に描いているだけですから。てことは, 「田舎で犬に会いました」って言ってるってことは, 田舎まで来ちゃったんでしょうね。「田舎で犬に会いました」。会うって言ってんだから, こっち側かな。あひるは, このくらいでしょう。田舎だから, 山じゃないですか。太陽もあるでしょう。風も吹いてるでしょう。

「ある日あひるが散歩した」, 「田舎で犬に会いました」, 「運動会でお弁当をぶちまけた」。うーん, そうですね。ここでどうするかですよ。絵本のいいところは, ページがめくれるということですから, それをうまいこと使うしかないですよ。「ある日あひるが散歩した」, 「田舎で犬に会いました」, 「運動会でお弁当をぶちまけた」, 「ある日あひるが散歩した」, 「田舎で犬に会いました」, 「運動会でお弁当をぶちまけた」……。なるほど。「運動会でお弁当をぶちまけた」んですから, どうしたらいいんだ? 「田舎で犬に会いました」。「運動会」って言ってるってことは, 「運動会に向かっていた」っていうことです。ということは, これ, 「おばあちゃんかおじいちゃん」てことですね。都会に住んでいるおじいちゃん, おばあちゃんが, 田舎に住んでいる孫のところへ, 運動会を見に来たんですよ。見に来たのに, お弁当ぶちまけた, と。何でか。「ぶちまけた」ってことは, こういうことですから, 何か, 多分, 手から滑

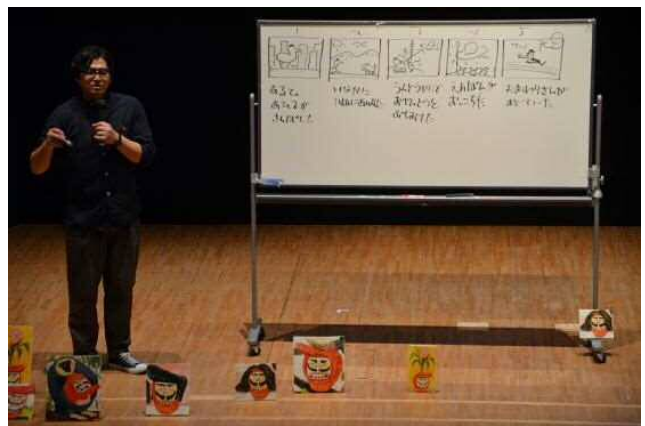
ったって訳じゃないと思うんですよね。「ぶちまけた」って言ってんですから。何か怒ったんでしょうね。何に怒ったか。

「円盤が落ちた」、「おまわりさんが驚いた」。はあはあはあ。「運動会でお弁当ぶちまけた」ってことは、「驚いた」。「驚いた」から「落ちた」。ああ、なるほど。うん、うん……ちょっと待ってね。「円盤が落ちた」ってことは、何か当たって「落ちた」……ボール投げ。ボール投げを、運動会で、お弁当ぶちまけた……違うなあ。

分かった、分かった。ああ、天才。こうやってお弁当食べてたら、ふわ、ふわ、ふわって、みんなでこうやって、これ、おじいちゃん、あひる、これ、赤ちゃんあひる。みんなでお弁当を、こうやってね、そしたら、UFOを見て、「わあっ。」って言って、ブワッてぶちまけた。ぶちまけたら、落ちた。電柱に当たったんだな。ここに電柱があることにしよう。電柱があって、電柱にダアッてぶち当たって、あああって驚きのおじいちゃんたち。上、見てんですよ、「あれ、何だべさ。」ってね。落ちた。

落ちたら、おまわりさんが驚いた。というのは、多分、お弁当やってる間に、こっちでは、コスプレの借り物競争をやっていた。おまわりさんの格好をしたこっちのあひるの人が、こうやって多分、スプーンか何かで、こうやって、ボールをペッペッてやってるんですよ。最近、借り物競争とかってないですよ。小っちゃい頃、なんか町民運動会とかって、普通にあったと思うんですけど、最近ないですよ。こっちありますか？ないですか？ありますか？あれね、大人たちが盛り上がり。こういうおまわりさんが、この、ドーンっていう音に、UFOがぶつかったドーンっていう音に、わーっわーっって驚いた……。

いやあ、無理ありましたねえ。いやあ、難しい。でも、僕の作品って、絵本が、結構何て言うか、シュールと言うか、変わった話が多いので、テキストもですね、全然普通の来ないんですよ。「何かこのテキストに絵を付けてください。」って言われることあるんですけど、本当にどうやって描いたらいいのっていう、そういうテキストが多くって。でも、そのたびに、描くといろいろな発見があって、いろいろ楽しめて。いつも楽しんでるんです



けども。「ある日あひるが散歩した。田舎で犬に会いました。運動会でお弁当をぶちまけた。円盤が落ちた。おまわりさんが驚いた。」ああ、なるほど。うう、上手。いつもこうやって、自分を無理矢理盛り上げて、作品を創っていますね。

あと、時間がもう少しなので、もし、今、ここで何か質問があればですね。答えられる範囲でお答えしようかなと思っているんですけども。何か、どういうことかとお聞きになりたいことがあれば、いかがでしょうか、ないですかね。

【聴衆】（『だるまだ！』ってそういうイメージで創られたんですか。）」

『だるまだ！』？これはもう、だるまがどこにいたら楽しいかっていう絵を先に考えて、あとでお話をくっつけたって感じですね。

【聴衆】（「そういうのが多いんですか、先生は。）」

そうですね、いろんな方法で。こういうふうでしか創らないって訳ではないんですけど。まあ、お話を中心に創ったり、同時に創ってったり、絵が先に創ってたりっていうのが、自分自身が作・絵だと、自由に途中でもどんどん変更ができるので、いろんなことを変えながら創っています。

【聴衆】（「分かりました。ありがとうございます。）」

ほかに、何か。はい。

【聴衆】（「こんにちは。会えてうれしいです。母親って、子供と絵を描いたりするときに、つい、いらぬことを言ってしまうなあって思って。自由に、のびのびと、大きく描いてくれたらいいなあって、とは思ってるんですけど。先生は、お子さんと、どんなふう楽しんでるのかなあっていうのと、あと、よく、子供で、さっきスライドで出てきた子供たちのように、どんどん自分の気持ちで描ける子は、本当にありのままがいいなあって思うんですけども。白い、真っ白い紙を前にすると、一步踏み出せない子供たちには、何かこう、例えば、丸一個描いて、そこから発想してみて、じゃないけど、何か、どんなヒントって言うか、楽しめる工夫が何かあったらどうかな、教えてほしいなって思います。）」

まずはですね、僕の子供との付き合い方なんですけども、やっぱり子供とはうまくできませんよね。こんなこと言ってますけども、普通に子供に対していらぬし、怒ったりします。楽しく遊べるときもあるんです。僕、だから、何か特別なことをしているって訳ではないと思います。その次にですね、僕のワークショップのことで言えば、最初に、「じゃあ、すぐに始めましょう。」っていう感じではなくって、結構説明に、ちょっとじらすような感じで、こうやって、こうやってやるんだよって、最初に一点か二点、本当に紙のど真ん中ぐらいに、僕が、ちょんちょんってくっつけると、あ、この程度でいいんだっていうことが分かって、そうするともう、「始め。」って言われると、勝手にやっちゃいますね。だから、真っさらだったら、多分躊躇ちゅうちよあるかもしれないですけど、何点か打つことによって、何か、ぱっとやってくれませぬ。

と、いうことで、時間になりました。まだ何か聞きたいことがあるかもしれませんが、また別の機会にということなので……。ありがとうございました。